

## 第 53 回生命情報科学シンポジウム 発表内容

★会長講演 川嶋 朗 (ISLIS 会長・東京有明医療大学 保健医療学部 鍼灸学科 教授)

### エネルギー療法

エネルギー療法とは、エネルギーを治療に利用したものであり、広義には、各種物理エネルギーを利用した治療がこのカテゴリーに属する。すでに西洋医学に応用されているものとして、癌治療に用いられる放射線療法、整形外科領域で利用されている電気治療や磁気治療などがあげられる。また西洋医学では認められていないもの、すなわち現代の科学では測定できないエネルギー（微細エネルギー）を応用したのもゆっくり広まりつつある。今回は、この微細エネルギーを応用した狭義のエネルギー療法について概説する。

★大会長講演 青山 圭秀 (株式会社アートオブサイエンス、元 カリフォルニア州立大学元客員教授)

### アーユルヴェーダの世界観 ～宇宙・生命・意識～

インド伝承医学アーユルヴェーダは「生命の科学」と訳され、聖仙らにより認知された医学が太古の昔より伝承されたものとされる。その基本概念はインド六派哲学のうちの「サーンキヤ哲学」に依拠しており、単なる医学・医療を超える側面をもつ。本講演では、アーユルヴェーダの世界観を古典から繙くと同時に、その基盤とされるトリグナ説と現代科学、特に宇宙論との対比を試みる。

★理事長講演 山本 幹男 (国際生命情報科学会 (ISLIS) 理事長・編集委員長<sup>1</sup>、  
国際総合研究機構 (IRI) 理事長<sup>2</sup>, 「潜在能力科学研究所」 創立責任者<sup>2</sup>)

### (新)国際総合研究機構(IRI)創立による 世界一の「潜在能力科学研究所」と「いやしのビル」の実現を目指して

国際生命情報科学会 (ISLIS) は、その兄弟組織でこの分野の幾多の研究成果を挙げてきた国際総合研究機構 (IRI) と共に、IRI「潜在能力科学研究所」を創設し「いやしのビル」を建設し、この分野の世界一の拠点に育てたい。企画、構想、連携、研究者や多方面の人材の推薦等で皆様のご協力を得たい。このために現本部にスペースを既に借増し、IRI スタッフの増員公募も進め、現在までに 30 名ほどの参加で 2 回の人財募集説明会も実施し、優秀な人材を既に 5 名ほど増員した。ISLIS の設立趣意は、物質中心の科学技術から、こころや精神を含んだ 21 世紀の科学技術へのパラダイム・シフト (枠組革新) を通じ、真理の追究と共に、人間の「潜在能力」の開花により、健康、福祉、教育と社会および個人の幸福や心の豊かさを大きく増進させ、自然と調和した平和な世界創りに寄与する事である。ISLIS は 1995 年の創立来 26 年半、現在の科学知識の延長で説明が出来そうも無い不思議なこころや精神を含んだスピリチュアル・ヒーリング、気功、潜在能力、超心理現象などの存在の科学的実証とその原理の解明を追求して来た。この間に生命情報科学シンポジウムを、海外での開催や 13 回の合宿形式を含め 53 回主催し、英文と和訳付の国際学会誌 *Journal of International Society of Life Information Science (J.Intl.Soc.Life Info.Sci. or Journal of ISLIS)* を年 2 号定期刊行し、総計 7,000 頁以上の学術論文と発表を掲載し続けてきた。この間に、不思議現象の存在の科学的実証には多くの成果を挙げた。しかし、その原理の解明は世界的にもほとんど進んでいない。本学会は現在、世界の 11 カ所に情報センターを、15 カ国以上に約 170 人の会員を、擁している。今回の第 54 回シンポジウムは「未知なる科学への挑戦 IX～統合医療・統合科学の模索～」を主テーマとして掲げ 2020 年 3 月 20 日(日)に Zoom で開催し 45 名ほどの参加で主催する。次回第 54 回は 2022 年 8 月 21・22 日(土・日)に Zoom で主催予定で演題など募集中である。これらの場でも、上記「潜在能力科学研究所」や「いやしのビル」創りも皆で大いに議論してもらいたい。

キーワード: 国際生命情報科学会, ISLIS, 生命情報科学, 潜在能力科学, 国際総合研究機構, IRI, 科学, 精神, 脳, 心身, 代替医療, CAM, 統合医療, IM, 予防医学, 未病, 精神神経免疫, スピリチュアル, ヒーリング, 気功, ヨーガ, 瞑想, 潜在能力, 催眠, 心, 不思議, 世界像, 世界観, 超常現象, 超能力, 超心理, 幸福。

## ★ミニ・シンポジウム 川嶋 朗、青山 圭秀、上馬場 和夫、根本 泰行

### 医学の創成・医学の未来

インド伝承医学アーユルヴェーダの古典には、『火とともに熱が、水とともに流れがあるように 生命の科学アーユルヴェーダは存在とともにあった』（チャラカ総論編 30-27）という有名な文言があります。また、『(世界に病と苦しみが現れたとき)創造主ブラフマーはアーユルヴェーダの知識を思い出し……』（アシュターンガ・フリダヤ 1・1・3）からは、創造主が宇宙創成を超えてこの知識を伝承したかのような記述がうかがえます。本ミニシンポジウムでは、人類の医学・科学の創成についてと同時に、これからの医学・医療の未来について、縦横に話します。

### ★特別講演 上馬場 和夫

(全国健幸の里創生コンソーシアム 世話人、NPO法人日本アーユルヴェーダ協会 理事長)

### 日本におけるアーユルヴェーダの過去と未来

アーユルヴェーダは、古代インドの叡智に基づくインド伝統医学として日本に入ってきたのは、1972年大阪大学医学部の故丸山博先生が有志とともにアーユルヴェーダ調査団を率いて、インドのグジャラート・アーユルヴェーダ大学を訪問したことから始まった。その後、稲村晃江氏が日本最初の Vidya ヴァイディヤとなり、故幡井勉先生が『古代インド医学』を翻訳出版し、クリシュナ・UK 氏の献身的な貢献により6年半のアーユルヴェーダ医師養成課程を終えた日本人が、2022年現在で約17名以上輩出した。その過程でアーユルヴェーダは、①不老長生法と②病気の治療法、さらに青山圭秀氏による「アガスティアの葉」による古代インドもつ超科学性などが人々を魅了させた。ただ、日本での医療においては、薬草の入手困難により正式にインド伝統医学アーユルヴェーダを取り入れている医療機関は殆どない。その状況を克服すべくアーユルヴェーダの遠隔医療の草分け JIVA AYURVEDA と組んだ Swastha Program が2022年から始まり、本場のアーユルヴェーダ的遠隔治療を日本に居ながら受けられるようになった。しかし、アーユルヴェーダが現代社会において必須とされる点は、単なる不老長生法だけでなく、肉体的生命が有限でありながら、生命の永続性を認識していることである。つまり生命の長い輪廻の流れの中で、変化流転することのない生命情報の存在を説いているのが生命の科学アーユルヴェーダである。その生命情報こそが、我々万人が内側に持つ内なる智慧である。

### ★一般講演 根本 泰行 (生命システム研究所)

### 宇宙究極の謎と理想的な社会の構築について

「宇宙究極の謎」とは、「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？」というもっとも根源的な「問い」のことである。私見では、誰もこの「問い」に対する「答え」を持っていない。すべての「存在者」は、存在の理由を知らないままに存在させられている。そのため、誰もが潜在意識の奥底では不安を抱えている。そのような世界の中で、人類社会が新しい世代を受け入れるには、少なくとも生きていく上で何の問題もない理想的な社会を構築することが、必須の要件ではないかと演者は考える。

### ★一般講演 高木 治<sup>1</sup>、坂本 政道<sup>2</sup>、河野 貴美子<sup>1</sup>、山本 幹男<sup>1</sup>

(1 国際総合研究機構(IRI)、2(株)アクアヴィジョン・アカデミー)

### ピラミッドパワーの科学的研究 (2007年10月~2022年3月)

我々は2007年10月以来、ピラミッド型構造物(pyramidal structure: PS)の未知なるパワー(ピラミッドパワー)に関して、被検者が入ることが可能なピラミッド模型を作製し、厳密に科学的な実験・分析を続けている。またピラミッドパワーを検出するバイオセンサ(食用キュウリ切片)の特性に関する研究も平行しておこなっている。そしてこれまでの研究成果として、11編の原著論文、3編の総合報告、書籍中の1編を報告した。本講演では主に下記原

著論文の研究成果(7) - (11)の、被検者の影響を除外した状況における、PS の潜在力によるピラミッド効果について発表する。今後これらの成果が広く認められ、科学における新たな研究分野となり、幅広い応用の可能性が期待される。なお、研究成果の詳細は、国際総合研究機構 (IRI) の HP に掲載していますので、ご覧ください。

<http://www.a-iri.org/iri-jp/>

キーワード：ピラミッド、潜在力、瞑想、無意識、遅延効果、エンタングルメント、バイオセンサ、キュウリ、ガス、サイ指数

★研究発表 栗田 昌裕 (群馬パース大学)

### 能力開発のための舌の運動「福舌法」の提案 (3) - 柔軟効果の検討 -

2018年、2020年のISLISシンポジウムでは、「能力開発のための舌の運動『福舌法』」の体系を提案した。今回はそのうちの簡単な2法で、身体柔軟度に変化が生ずるかを検討した。

【方法と結果】平均21歳の20人ずつの集団A、B、Cを対象とした。柔軟度は、前屈(cm)、体幹右旋(度)、首左回旋(度)、首伸展(度)の4法で調べ、運動の前後での差の平均値 $S=(S_1, S_2, S_3, S_4)$ を調べた。A群では運動をせずに柔軟度変化を調べ、 $S=(1.6, 2.0, 1.8, 2.0)$ を得た。B群では、「頬内側かつ歯列外の空間Oに舌先を入れ、しっかりと舌を伸展させたまま、以下の4カ所を舌筋に力を込めて強く5回ずつ押した：(a)Oの上極、下極、(b)Oの左側と右側の歯列外の最奥点。運動の前後で、 $S=(2.5, 8.0, 8.0, 5)$ を得た。C群では、B群と同じ運動をしながら、3本の手指を合わせて、頬の外側から舌を5回強く圧迫した。その前後で、 $S=(4.4, 15.5, 8.8, 7.5)$ を得た。A群とB、C群との間には平均値の有意な差が認められた。

【考察】簡易な舌運動が頸部や体幹の柔軟度に即効を持つことが示された。舌運動は口腔領域のみでなく、身体全体により影響を持つことが示唆される。

★研究発表 高木 治<sup>1</sup>、坂本 政道<sup>2</sup>、河野 貴美子<sup>1</sup>、山本 幹男<sup>1</sup>

(1 国際総合研究機構(IRI)、2(株)アクアヴィジョン・アカデミー)

### ピラミッド効果によるバイオセンサ間のエンタングルメント (絡み合い) によって

#### 変化するガス濃度の周期的日内変動

我々は2007年10月以来、ピラミッド型構造物(pyramidal structure: PS)の未知なる「パワー」に関して、バイオセンサ(キュウリ切片)を使用し、厳密に科学的な研究を続けている。これまでの我々の研究成果から、PSによるピラミッド効果は次の2つに分類することができた。それは、(i) PSの潜在力がバイオセンサに影響を与えるピラミッド効果。(ii) PS内部に被験者が入って瞑想をした場合、PSが被験者の未知エネルギーを変換してバイオセンサに影響を与えるピラミッド効果。の2種類のピラミッド効果である。(i)に関して、これまでに次の4つの結果を得た。1) PSの潜在力によって、PS頂点に置いたバイオセンサに影響を与えるピラミッド効果の存在を明らかにした(春分と秋分で1年を2つの期間に分けた時、各期間のピラミッド効果を比較した結果、有意差を得た。 $p=6.0 \times 10^{-3}$ , Welch's t-test, two-tails, これ以降のp値も同様)。2) PSの潜在力によって、PS頂点に2段に重ねて置いたバイオセンサに影響を与えるピラミッド効果が、下段と上段で異なることを明らかにした(ピラミッド効果の大きさを示すサイ指数が、下段のバイオセンサに対するサイ指数は-3.01でマイナスの値、上段に対するサイ指数は5.52でプラスの値となり、下段と上段のピラミッド効果の間で有意差を得た。 $p=4.0 \times 10^{-7}$ )。3) PSの潜在力に関して、季節変動する潜在力と、季節変動しない潜在力の2種類存在し、それぞれの潜在力によるピラミッド効果が存在することを明らかにした。4) PSの潜在力によって、バイオセンサ間のエンタングルメントと考えられる現象を明らかにした。つまりエンタングルメントにより、PSの潜在力の影響を受けた実験試料が8m離れた校正基準点の対照試料に影響を及ぼすことが明らかとなった。また、エンタングルメントによる影響は季節によって変化することも判明した。本発表では、バイオセンサ間のエンタングルメントの新たな特性について報告する。バイオセンサから放出したガス濃度の日内変動の周期性を解析した結果、周期性がエンタングルメントによって変化することを発見した。また、ガス濃度データを冬、春、夏、秋の四季に分けて解析した結果、エンタングルメントにより日内変動の周期性が季節によって変化することが判明した。ピラミッドパワーに関する研究は、未だアカデミズムの世界では異端と見做されることが多い中、我々

の実験結果は、この分野において世界初の研究成果である。今後この成果が一般に広く認められ、科学における新たな研究分野となり、幅広い応用の可能性が期待される。

キーワード：ピラミッド、潜在力、日内変動、周期性、エンタングルメント、バイオセンサ、キュウリ、ガス、サイ指数

★研究発表 橋爪 秀一（Idea-Creating Lab）

### 目指せ、潜在意識による共生（鹿編）

古くから、日本人は鹿に対して可愛らしい、高貴である等の好印象を持っており、神使或は神獣として崇めてきた。しかし、現在、毎年約60万頭の鹿が害獣として駆除されており、駆除された鹿の大部分は、ゴミとして廃棄されているのが現状である。我々は鹿との共生を目指すためにも、駆除された鹿を有効資源として利用すべきと考えており、鹿肉、鹿皮や鹿茸の天然資源としての価値を模索している。

今回は、ニュージーランド、台湾、モンゴル、スコットランド、中国及びドイツにおける鹿との付き合い方と鹿の資源としての利用法について報告し、鹿との共生方法について考察したい。更に、我々は、自然、動物、植物、他国、他人など様々な対象との平和的な共生が求められるが、それらとの共生にこれを如何に生かすかも模索していきたい。

キーワード：鹿、共生、害獣、潜在意識、天然資源

★一般発表 黒須 美枝（アートセラピストアカデミー（有））

### アートセラピーで「自己表現」には意識的と無意識があることに気づく

自分の性格において「自分は気づいていないが、人は気づいている」と言うことがあり、人間関係を阻害する一つの要因になっている。また、自分が関心を持った相手への働きかけと、関心の無い相手へとでは、無意識に言動が異なりそれにも気づかないことが多い。アートセラピーによって、普段から自分が情報発信(=表現)していること、特に「無意識に表現していること」に「気付かされて」、そのことに「意識的になる」ことで人生に(→よい方向への)変化が起こった例を紹介する。一例として単に言葉として「ペット」の画を描いてもらい、次にそのペットに名前を付けるとして描いてもらうと、各自共通の傾向が見られる。